

## 2023年度点検・評価シート

- ・評価の視点【基礎要件●】は法令要件、その他基礎的要件の充足状況を判断する指針  
【評価要件○】は基礎要件以外で、大学基準協会が大学基準に照らし定めた指針
- ・評価の視点に“※”が付されている場合は、大学基礎データ、基礎要件確認シート及び別途収集する根拠資料により、点検・評価し、適切性を判断してください。
- ・★のある欄は、必須記述欄です。ただし、該当なしと判断した場合は「なし」と記入してください。
- ・◆のある欄は、各点検・評価項目の内容について、問題点を記入してください。（ない場合は「なし」と記入）

## I【現状】原則2023年5月1日現在の状況で回答してください。

対象部局	04 英米文学科	責任者	ジョージ・ウォレス		
基準4	教育課程・学習成果	自己評価	B		
★基準4の自己評価の理由を簡潔に解説してください。					
<p>《回答》 本学科では、英米文学・英語学・英語圏文化、そして語学としての英語の四つを柱とする教育課程を編成し、学生それぞれが専門とする分野によって1・2年次の基礎教育、3・4年次の専門教育へとスムーズに学修が進むよう科目群が配置されている。基礎教育においては、高大接続・初年次教育を重視し、大学での学びの基礎を学生が修得するための必修・基礎教育科目を設置している。英米文学科の教育課程そのものは高く評価できるものである。</p> <p>他方、本学科の教育課程が長年抱えるいくつか課題がある。課題には、学習成果の評価指標である卒業論文提出率の低さ、本学科生の語学力の底上げの必要性、3・4年次の語学科目の少なさ、などが挙げられる。現在新カリキュラム委員会を中心に、新カリの策定の議論の中で、現カリの枠組みの中で実行できる改善・向上についても学科内で話し合われている。その中で基礎教育科目の語学科目の授業概要に関するガイドラインを策定し、科目担当者に配信した。</p> <p>また、本学科の教育課程を経た学生が、上記4つの柱の中から自分が取り組みたいと思う分野を見出し、4年次の卒業論文執筆にスムーズにつながるためにも、論文・レポートを書くという基本的作業のより丁寧な指導が必要であり、特に初年次教育でのより充実したレポート指導が求められる。初年次教育でのレポート指導の必要性は、新カリの議論においても何度も指摘されている。</p> <p>以上、学科内で、教育課程の様々な問題点に対する取り組みがなされており、その成果が未だ学習成果となって現れていないものの、今後の更なる努力を通じて成果が現れることが期待されることから、B評価が適当と判断した。</p>					
点検・評価項目(1)	4-1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。				
★<学位授与方針>	<p>英米文学科は、卒業に必要な単位を取得し、以下に示すような能力を備えていると認められる学生に、卒業の認定を行い、学士（英米文学）の学位を授与する。</p> <p>1. 豊かな教養と専門的知識およびそれを活用する技能</p> <p>(1) 英語の文法、語彙などに関する十分な知識を習得している。</p> <p>(2) 英語をコミュニケーションの手段（読む・聞く・書く・話す）として運用する能力を有している。</p> <p>(3) 英米文学・文化に関する十分な知識を習得している。</p> <p>(4) 英語学に関する十分な知識を習得している。</p> <p>2. 他者との共同による問題発見・解決能力と、それを支える思考・判断・表現力</p> <p>(1) 英米文学の作品（小説・詩・演劇など）を読み解き、その学修成果を他者に伝達できる。</p> <p>(2) 英語という言語の特質や仕組みを理解し、その学修成果を他者に伝達できる。</p> <p>(3) 英語圏文化の特質を理解し、その学修成果を他者に伝達できる。</p> <p>(4) 文献を批判的に読み、自ら発見した問題を解決するために論理的に議論できる。</p> <p>3. 自律的学習者として学び続け、社会に貢献する意欲と能力、社会の担い手としての使命感</p> <p>(1) 英語圏の文学・文化および英語学の研究を通して、現代世界の諸問題への理解を深め、その解決に貢献する意思を有している。</p> <p>4. 本学の建学の精神や本学の理念に対する理解</p> <p>(1) 文化および言語の多様性への深い理解を持ち、多文化社会で活躍できる。</p>			変	有( )
		更	無(○)		
評価の視点1	上記の方針は、修得すべき知識、技能、態度等の学修成果が明示され授与する学位にふさわしい内容となっている。				
【基礎要件●】					

評価の視点2※ <b>【基礎要件●】</b>	上記の方針を公表しており、媒体や表現の工夫等により、情報の得やすさや理解しやすさに配慮している。 根拠資料→A1-6-1Web サイト (大東文化大学の基本方針)、基礎要件確認シート7	
<b>◆学位授与方針の内容や、公表の仕方について問題点があれば記述してください。</b>		
≪回答≫なし。		
点検・評価項目(2)	4-2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。	
英米文学科は、卒業認定・学位授与方針に掲げる能力を修得させるために、以下のような内容、方法、評価の方針に基づき、教育課程を編成する。  1. 教育内容 (1) 英語の実用的な運用能力を高め、国際的な場面で様々な文化的背景の人々とも、主体性・協調性を持って交流することのできる国際感覚を培う。「Freshman Seminar」「Speaking/Writing/Reading English」「英語文化コミュニケーション演習」など。 (2) 英米を中心とする英語圏の文学・文化・歴史・社会への知識を深め、その特徴と多様性の理解を目指す。英米の小説・詩・演劇・児童文学関連科目、「英米児童文学を味わう」「英文学入門」「米文学入門」「イギリス文化論」「アメリカ文化論」など。 (3) 英語の様々な側面をより複眼的、多面的にとらえ、その成り立ちと機能をより正確に理解できるようにする。「英語学入門」「英語の音声」「英語の歴史」「言語のしくみ」「英文法論」など。 (4) 現代社会における文学・文化の価値の展開と発展について理解することで、東洋文化と西洋文化との差異や民族間における文化の差異を越えた交流を行うための知見を深める。「東西文化交流論」「比較文化論演習」など。 (5) 英語・英語圏文学・文化に関し、他者の様々な意見を参照し、それを基礎として、自分自身の意見や思考を論理的に構築する力を養う。「ゼミナール」「卒業論文」など。 (6) 英語以外のヨーロッパ諸言語または他の地域の外国語を身に付ける。「フランス語基礎」「ドイツ語基礎」「スペイン語基礎」「中国語1」など。 (7) 英米文学、英語学、英語圏文化以外の人文学、また社会科学、自然科学に触れることにより、大学生として当然身に付けておかななくてはならない教養と知識および知的好奇心を養う。それと同時に、他分野と専門分野の関連性を見出すことによってさらに深い洞察力を身に付ける。「哲学 AB」「芸術学 AB」「社会学 AB」「経済学 AB」「数学 AB」「生物学 AB」など。 2. 教育方法 (1) 初年次教育においては、少人数のゼミ形式の授業における実践を通じて、発表の仕方、発表資料の書き方、レポートの書き方、ノートの取り方、図書館活用方法など、大学での学びの基礎を身に付ける。 (2) 2年次において「英文学」「米文学」「英語学」を講義形式で導入し、専門科目に関する広範な知識を身に付ける。 (3) 1, 2年次の英米の小説・詩・演劇・児童文学関連科目では、英米文学の様々なジャンルの具体的作品に原文で触れながら、ディスカッション形式で文学作品の持つ内容、形式について学ぶ。 (4) 3年次には英文学、米文学、英語学、英語圏文化の分野に関する少人数制のゼミナールを、学生同士の討論または学生による発表を含むアクティブ・ラーニングを取り入れた形式で運営する。 (5) 4年次の卒業論文では、教員と卒業生との間の一対一指導、およびゼミ形式で、テーマの確定、資料の分析、論文執筆を進める。 3. 評価方法 (1) ディプロマ・ポリシーで掲げられた能力の評価として、英米文学科における単位取得状況、卒業要件達成状況、卒業論文の内容などによって測定するものとする。 (2) 短期・長期留学を奨励し、現地での語学研修結果、単位取得状況を当該学生の留学地での学修成果として評価する。 (3) 語学検定試験の受験を奨励し、その試験結果を当該学生の総合的学修成果として考慮する。	変 有( ) 更 無( )	
評価の視点1 <b>【基礎要件●】</b>	上記の方針は、教育課程の体系、教育内容、教育課程を構成する授業科目区分、授業形態など、教育についての基本的な考え方を明示している。	
評価の視点2 <b>【基礎要件●】</b>	上記の方針は、学位授与方針に整合している。	

評価の視点3※ <b>【基礎要件●】</b>	上記の方針を公表しており、媒体や表現の工夫等により、情報の得やすさや理解しやすさに配慮している。 根拠資料→A1-6-1Web サイト（大東文化大学の基本方針）、基礎要件確認シート7
<p><b>(DP と CP の各項目の番号を矢印で紐づけてください。)</b></p> <p>DP1 (1) → CP1. (1) CP2. (1) CP.3. (1) (2) (3)</p> <p>DP1 (2) → CP1. (1) CP2. (1) (3) (4) CP.3. (1) (2) (3)</p> <p>DP1 (3) → CP1. (2) CP2. (2) (3) (4) (5) CP.3. (1)</p> <p>DP1. (4) → CP1. (3) CP2. (2) (4) (5) CP.3. (1)</p> <p>DP2 (1) → CP1. (4) (5) CP2. (3) (4) (5) CP.3. (1)</p> <p>DP2 (2) → CP1. (3) (5) CP2. (4) (5) CP.3. (1)</p> <p>DP2 (3) → CP1. (2) (5) CP2. (3) (4) (5) CP.3. (1) (2)</p> <p>DP2 (4) → CP1. (3) (4) (5) CP2. (4) (5) CP.3. (1)</p> <p>DP3 (1) → CP1. (3) (4) (5) (6) (7) CP2. (3) (4) (5) CP.3. (1)</p> <p>DP4. (1) → CP1. (1) (2) (4) (6) (7) CP2. (4) (5) CP.3. (1) (2)</p>	
<p>★項目(2) 4-2DP1 から DP4 について、それぞれの内容がどのように CP の内容に反映されているのか (あるいは教育課程のどこで具現化されるのか)、その連関について説明してください。</p> <p>以下の事例を参考に記述してください。※事例は過去のものであります。なおここでは DP1 のみ抜粋ですが続きがあります。</p> <p>・DP「1. 知識・技能」(1)に明示した、「日本の文学と言語・文化に関する基本的な知識」「専門的な知見」と、DP「1. 知識・技能」(2)の「文献や資料を的確に読解する」については、CP「1. 教育内容」(1)で、『日本文学史概説』『日本語学概説』などで体系的・通史的な知識や素養を身につけ』とされ、CP「1. 教育内容」(2)で『「日本文学講読」「日本語学講読」や各分野の「特殊講義」などで、特定の主題に関する専門的な知識を身につける。』と明示されている。</p> <p>〈回答〉 DP「1. 知識豊かな教養と専門的知識およびそれを活用する技能」に明示した(1)「英語の文法、語彙などに関する十分な知識」と(2)「コミュニケーションの手段(読む・聞く・書く・話す)として運用する(英語)能力」については、CP「1. 教育内容(1)」に示された「Freshman Seminar」「Freshman English: Speaking/Reading/Writing/Culture」「Speaking/Reading/Writing/Culture through English」などの1・2年次科目群に反映されており、これらの科目を通じて、主にネイティブスピーカー教員の指導の下、「国際的な場面で様々な文化的背景の人々とも、主体性・協調性をもって交流する」とできる国際感覚を養うよう編成されている。</p> <p>DP「1.」の(3)「英米文学・文化に関する十分な知識」は、CP「1. 教育内容(2)」に示された「英米の小説・詩・演劇・児童文学関連科目」、例えば「英米児童文学を味わう」「英文学入門」「米文学入門」「イギリス文化論」「アメリカ文化論」などの科目を通じ養われる。これらの科目を通じて「英語圏の英語圏の文学・文化・歴史・社会への知識を深め、その特徴と多様性の理解を目指す」。他方、DP「1.」の(4)の「英語学に関する十分な知識」は、CP「1. 教育内容(3)」に示された「英語学入門」「英語の音声」「英語の歴史」「言語のしくみ」「英文法論」などを通じて教授され、これらの科目を通じて「英語の様々な側面をより複眼的、多面的にとらえ、その成り立ちと機能をより正確に理解できるようにする」。</p> <p>DP「2. 他者との共同による問題発見・解決能力と、それを支える思考・判断・表現力」に明示した「英米文学の作品(小説・詩・演劇など)を読み解く能力、「英語という言語の特質や仕組みを理解」する能力、「英語圏文化の特質を理解」する能力、さらにこれら文学作品、英語学、英語圏文化に関する「学習成果を他者に伝達する」能力は、CP(2)の教育内容を基盤とし、主にCP「1. 教育内容(5)」に反映しており、「ゼミナール」「卒業論文」および英米文学、英語学の演習科目を通じて養われる。これらの科目を通じて知識・見解を統合し、「他者の様々な意見を参照し、それを基礎として、自分自身の意見や思考を論理的に構築する力を養う」ように科目群が編成されている。またこの教育内容は、DP「2.」(4)に示された「文献を批判的に読み、自ら発見した問題を解決するために論理的に議論できる」力の養成をも反映している。</p> <p>DP「3」に示された「英語圏の文学・文化および英語学の研究を通して、現代世界の諸問題への理解を深め、その解決に貢献する意思」に関しては、CP「1. 教育内容(3)(4)(5)(6)」に示される英米文学・英語学・英語圏文化といった専門分野に関する知識、見解を基盤とし、CP「1. 教育内容(7)」に示された「哲学AB」「芸術学AB」等の全学共通科目を通じて他分野と専門分野の関連性を見出す過程で、自身の専門知識をより広い世界に应用する力と意思を養うよう、科目群が編成されている。</p> <p>DP「4」の「文化および言語の多様性への深い理解を持ち、多文化社会で活躍できる」力に関しては、主に「CP「1. 教育内容(4)」に反映されている。「東西文化交流論」「比較文化論演習」などの科目を通じ、「現代社会における文学・文化の価値の展開と発展について理解することで、東洋文化と西洋文化との差異や民族間における文化の差異を越えた交流を行うための知見を深められるよう、科目群が編成されている」。</p>	
<p>◆教育課程の編成・実施方針の内容や、公表の仕方について問題点があれば記述してください。</p>	
<p>〈回答〉なし</p>	

点検・評価項目(3)	4-3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
評価の視点1※	教育課程の編成・実施方針と教育課程の整合性を図っている。根拠資料→A1-1*学則、A4-43Web サイト シラバス	
評価の視点2※	学習の順次性に配慮した各授業科目の年次・学期配当をしている。根拠資料→B4-68Web サイト カリキュラムツリー	
評価の視点3※	専門分野の学問体系を考慮した教育課程を編成している。根拠資料→A4-12Web サイト カリキュラムマップ	
評価の視点4※	学習成果を修得させるために適切な授業期間を設定している。 根拠資料→A1-1*学則、B1-10-1~8 2023 年度 各学部履修の手引き	
評価の視点5※	単位制度の趣旨に沿った単位の設定をしている。根拠資料→A1-1*学則、基礎要件確認シート9、10	
評価の視点6※	教育課程を編成する措置として、個々の授業科目の内容及び方法は適切に設定されている。 根拠資料→A4-13Web サイト 科目ナンバリング、A4-43Web サイト シラバス	
評価の視点7※	編成方針に基づき、授業科目を必修、選択等位置づけており履修の手引きに掲載している。 根拠資料→B1-10-1~8 2023 年度 各学部履修の手引き	
評価の視点8	初年次教育・高大接続に配慮した授業として、「プレイメントテスト」などによるクラス編成や、基礎的な科目の内容を深める授業を実施している。	
★項目(3) 4-3①初年次教育・高大接続に配慮した授業について、根拠資料(該当するシラバス、履修の手引き該当ページなど)を用いて、概要を解説してください。		
評価の視点9※	<p>教養教育と専門教育を適切に配置している。 根拠資料→B1-10-1~8 2023 年度 各学部履修の手引き</p>	<p>「回答」 一年次配当の必修基礎教育科目の Freshman Seminar は、新入生が「大学での勉強の方法(資料収集、資料分析の仕方、レポートの書き方)、プレゼンテーションの方法、語学学習の方法、大学内の諸施設の利用の仕方など、大学生活の基本を身につけるための科目として設置されている。同時に、本科目では「本学科の専門分野である英米文学、英語学、英語圏文化について導入」を行う科目である。</p> <p>また、選択基礎教育科目の Basic English は、中学・高校で学習する基礎英語の補習を行うために設置されている。原則、基礎英語力の不足を自覚している学生が自主的に履修する科目であるが、年度初めに実施されるプレイメントテストで下位の学生に履修を強く推奨している。</p>
評価の視点10※	<p>学科の教育研究上の目的や課程修了時の学修成果と、各授業科目との関係を明確にしている。 根拠資料→A4-12Web サイト カリキュラムマップ</p>	
評価の視点11	<p>学生の社会的、職業的自立を図るために必要な能力を育成する教育を実施している。</p>	
★項目(3) 4-3②社会的、職業的自立を図るために必要な能力の育成として実施しているキャリア教育について、根拠資料(該当するシラバス、教育プログラムの場合はその制度が分かる資料など)を用いて回答してください。		
「回答」なし。	<p>「回答」なし。 根拠資料→04-C4-2: なし</p>	
★項目(3) 4-3③「DAITO BASIS」科目として推奨されている科目で、全学共通科目以外として推奨している学部開設の科目について、科目名を明記してください。また、その設定・選定の基準について説明してください。		
<p>「回答」 Freshman English :Culture A/B; Freshman English :Speaking A/B 英米文学科の基礎教育科目(語学科目)の中で、「大東学士力」(1)の関連し、特に異文化理解、教員・学生の双方向のコミュニケーションを中心的教育内容に据えた科目を選定した。</p>		
★項目(3) 4-3④当該部局のカリキュラム全体の編成と、授業科目の配置の特色について解説してください。		
<p>「回答」本学科のカリキュラム編成の理念は、「英語に関する教養を身につけること——英語圏の文学、言語、文化についての素養を基盤とした広く深い見識を持つようになること」であり、この理念に基づく(1)分野の多様性、(2)原典講読に基づく教養の育成、(3)1・2年次の少人数クラスでの英語教育、という3つの特色がある。</p> <p>(1)本学科カリキュラムの分野は、(a)語学としての英語、(b)英米文学、(c)英語学、(d)英語圏文化に広がる。(a)に関しては1・2年次の必修基礎教育科目を設置する一方、3・4年次でも必修選択科目として英語科目を設置している。(b)(c)(d)に関しては、主に3・4年次に各分野の必修選択・選択科目群を設置している。</p>		

<p>(2) 初年次教育での、英語の原典講読に基づく教養の涵養に重きを置き、小説・詩・演劇・児童文学に関する英語文献をテキストの講読に重きをおいた、「～を味わう」という名称の選択必修科目を設置している。これらの科目は、3・4年次配当の、高い専門性を持つ演習科目に繋がっている。</p> <p>(3) 初年次教育において、英語の Speaking, Reading, Writing の基礎能力を身に付け、また英語圏文化を英語を通じて理解するための必修の基礎教育科目を25名以下の少人数クラスで設置している。</p>	
<p><b>◆授業科目の開設や、教育課程の体系的な編成について問題点があれば記述してください。</b></p>	
<p>〈回答〉英米文学の専門教育科目（必修科目を除く）の多くが3年次配当となっており、1・2年次に履修できる専門教育科目が少ないため、専門教育科目の配当年次の検討が必要である。また、板橋校舎開講科目に、語学科目や英語を教授言語とする授業が少ないため、1・2年次に続いて3・4年次にも継続して英語に触れることができるよう、カリキュラム上の改定が望まれる。</p>	
<p>点検・評価項目(4)</p>	<p>4-4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。</p>
<p>評価の視点1※ 【基礎要件●】</p>	<p>学位課程の特性に応じた単位の実質化を図るため、履修登録単位数の上限設定を実施している。 根拠資料→A1-1*学則、基礎要件確認シート9</p>
<p>★項目(4) 4-4①履修登録単位数の上限設定について、一部の科目を対象外としている場合、単位の実質化を図るうえでどのような措置をとっているか回答してください。 (注:「単位の実質化を図る措置」としては、教育課程上の配慮、授業時間外における学習を促進するための取り組みや、学習支援などです。いずれの場合もどのように取り組んでいるかを具体的に記述してください。)</p>	
<p>〈回答〉 実施していない。</p>	
<p>★項目(4) 4-4②規則上、長期海外留学からの帰国学生、編入学生、転学部・転学科生については、教授会の審査・承認を経て、上限を超える履修登録を認めることができる(履修登録単位数の上限を超えることを承認した教授会議事録が必要)。とあります。この場合も単位の実質化を図るうえでどのような措置をとっているか回答してください。</p>	
<p>〈回答〉長期海外留学からの帰国学生に関し、上限を超える単位認定を行うことはない。本学科では、編入学生、転学部・転学科生については、単位の実質化を図るための措置はとっていない。</p>	<p>〈根拠資料〉 04-C4-3 学科内国際交流業務 20190308</p>
<p>★(上限設定の対象外としている科目を履修登録している学生数を記入してください。)</p>	
<p>①諸資格科目(教職課程科目、その他諸資格科目、副専攻等)履修学生数: 134人 ②長期海外留学終了者 学生数: 0人 ③編入生 学生数: 0人 ④転学部・転学科生 学生数: 0人</p>	
<p>評価の視点2※</p>	<p>シラバスの内容(到達目標・学修成果の指標・授業内容及び方法・授業計画・授業準備のための指示・成績評価方法及び基準等の明示)に基づいた授業を実施し、整合性が図れている。 根拠資料→A4-43Web サイト シラバス、B6-21-1「学生による授業認識アンケート」</p>
<p>評価の視点3※</p>	<p>シラバスの記載内容の第三者チェックの実施結果を教授会で報告、検証している。 根拠資料→B4-40 シラバスチェック実施報告、B4-42 シラバスチェック体制</p>
<p>評価の視点4</p>	<p>学生の主体的参加を促す授業形態、授業内容及び授業方法を取り入れている。</p>
<p>★項目(4) 4-4③学生の主体的参加を促す授業について、以下(1)(2)(3)(4)に該当する事例を根拠資料(該当するシラバス、履修の手引き該当ページなど)を用いて解説してください。</p>	
<p>(1)主体的な学び(演習、実習、フィールドワークなど)の事例</p>	
<p>〈回答〉 3年次のゼミナール、4年次の卒業論文は、「英語・英語圏文学・文化に関し、他者の様々な意見を参照し、それを基礎として、自分自身の意見や思考を論理的に構築する力を養う」科目として設定されている。ゼミナールでは、学生たちの主体的な意見交換の中から自ら気付くことを重視した授業運営がなされている。卒業論文の授業は、個々の卒論生のテーマに沿って研究を進めつつ、卒論執筆の準備の経過発表を行う中で、自ら発表をし、他の学生からの質疑に応じる中で、新たな視点に気付くように運営されている。</p>	<p>〈根拠資料〉 04-C4-5: ①B1-10-1 2023年度文学部履修の手引き, p.47. ②2022年度ゼミナール(菊池かおり先生)シラバス ③2022年度卒業論文(小池剛史先生)シラバス</p>
<p>(2)インタラクティブ(双方向)な授業展開のための少人数授業の事例</p>	
<p>〈回答〉 夏季休暇中に、選択必修科目「英語・文化コミュニケーション演習1」という10日間(90分×3×10日間)の日程で開講された。英語ネイティブスピーカーによる、完全に英語を教授言語と</p>	<p>〈根拠資料〉 04-C4-6: 2022年度英語</p>

<p>する講座である。履修生は、英語圏でホームステイをしながら英語を学ぶ留学生であるという設定で、教室内で履修生同士、教員・履修生とが英語でコミュニケーションを取る授業である。履修者数は20名以下に設定されている。</p>		<p><b>文化コミュニケーション 演習1シラバス</b></p>
<p><b>(3)教員・学生間や学生同士のコミュニケーション機会の確保の事例</b></p>		
<p>《回答》 2023年度新入生に対し、3年ぶりに対面でのオリエンテーションを開催した。まだコロナ禍ということもあり、コロナ以前のような飲食を伴う懇親の場はなかったものの、各クラスに分かれて、教員、新入生、またアルバイト学生たちが教室に集まり、自己紹介、他己紹介を含む様々なアイスブレイキングのための活動が行われた。</p>		<p>《根拠資料》 <b>04-C4-7 2023年度新入生 オリエンテーションプロ グラム</b></p>
<p><b>(4)授業方法として、グループ活動の活用の事例</b></p>		
<p>《回答》多くのゼミナールでは、教員による講義および学生によるグループ発表、そして全体のディスカッションを交えた演習形式の授業が行われている。</p>		<p>《根拠資料》 <b>04-C4-8 :</b> <b>①B1-10-1 2023年度文 学部履修の手引き, p.47.</b> <b>②2022年度ゼミナール(照 沼阿貴子先生)シラバス</b></p>
<p><b>(5)効果的な授業方法について上記(1)~(4)以外の事例</b></p>		
<p>《回答》 特になし。</p>		<p>《根拠資料》 <b>04-C4-9 : なし</b></p>
評価の視点5	学習の進捗と学生の理解度の確認	
<p><b>★項目(4) 4-4④授業を行ううえで、学習の進捗と受講する学生の理解度の確認をするために、当該部局としてどのような措置を講じているか、回答してください。</b></p>		
<p>《回答》 各授業の中で担当教員がそれぞれの方法（例：授業内での学生のパフォーマンスや、Manaba等を通じての提出物への教員からのコメント）で学生の理解度を確認しているが、学科として全教員に向けて奨励しているような措置はない。しかし、学科から基礎教育科目担当者に向けて配信した「語学科目の授業概要」の中で、学生の提出物に対してコメントし、学生の学びの進捗と理解度の確認を行うよう注意喚起をしている。</p>		
評価の視点6※	<p>授業の履修に関する指導、その他効果的な学習のための指導 (履修登録に関するガイダンスやオリエンテーションなど適切な履修指導を実施している(オンラインも含む))。根拠資料→B4-69 履修登録に関するガイダンスやオリエンテーション実施要項、(オンラインの場合はWebサイトも可→別紙の備考にURL記入)</p>	
評価の視点7※	<p>授業外学習に資する適切なフィードバックや、量的・質的に適当な学習課題の提示 根拠資料→A4-43Webサイト シラバス</p>	
<p><b>★項目(4) 4-4⑤オンライン教育も含めて、授業外学習に資するフィードバックの方法や、量的・質的に適当な学習課題を提示しているか、どのように確認していますか。その方法などについて根拠資料を用いて回答してください。</b></p>		
<p>《回答》 特になし。</p>		<p>《根拠資料》 <b>04-C4-10 : なし</b></p>
評価の視点8	授業形態によって1授業あたりの学生数について配慮している。	
<p><b>★項目(4) 4-4⑥授業形態(講義、実習、演習)によって、1授業あたりの学生数を設定している場合、授業形態別に事例を回答してください。(例：演習科目、実習科目は少人数(原則10名以下)、大規模講義科目は原則200名まで、など)</b></p>		
<p>《回答》 「ゼミナール」は約15名、「英語・文化コミュニケーション演習1」や「English Composition A/B」「English Conversation A/B」は、20名を上限としている。</p>		
評価の視点9	学習を活性化するための学習支援ツールや授業外学習(予習・復習)を奨励する取り組みを実施している。	
<p><b>★項目(4) 4-4⑦学習支援ツールや授業外学習(予習・復習)を奨励する取り組みについて、記述してください。</b></p>		
<p>《回答》 特になし。</p>		<p>《根拠資料》 <b>04-C4-11 : なし</b></p>
<p><b>◆学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための措置について問題点があれば記述してください。</b></p>		
<p>《回答》 項目(4)4-4④で言及した、基礎教育科目担当者へのガイドライン「語学科目の授業概要」の中で、1, 2年次の4技能それぞれの科目で目指すべき到達目標を提示し、その後アンケートを実施し、学科の提示した到達目標の実現可能性を尋ねた。その結果、数名の教員が実現可能性は低いと回答し、その理由として、学生間の語学能力の差、学生の学習意欲の低さなどの点を挙</p>		

げていた。効果的な語学教育を行う上で、担当教員間の学科を通じての情報共有、使用教科書の検討、そして、少なくとも緩やかな形で能力別クラス分けが望まれる。

点検・評価項目(5)	4-5 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
評価の視点1※ 【基礎要件●】	<p>成績評価及び単位認定を適切に行うための措置として以下を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単位制度の趣旨に基づく単位認定</li> <li>・既修得単位認定等の適切な認定</li> <li>・GPAによる成績評価</li> <li>・成績評価の客観性、厳格性、公正性、公平性を担保するための措置</li> <li>・卒業・修了要件の明示</li> <li>・成績評価及び単位認定に関わる全学的ルールの設定その他全学内部質保証推進組織の関わり</li> </ul> <p>根拠資料→A1-1*学則、基礎要件確認シート 10,12、B4-74 オンライン教育に鑑み成績評価の公正性、公平性を担保するための措置を示す資料</p>	
評価の視点2※ 【基礎要件●】	<p>学位授与を適切に行うための措置として以下を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学位論文審査がある場合、学位論文審査基準の明示・公表【修士・博士】</li> <li>・学位審査及び修了認定の客観性及び厳格性を確保するための措置</li> <li>・学位授与に係る責任体制及び手続の明示</li> <li>・適切な学位授与</li> <li>・学位授与に関わる全学的なルールの設定その他全学内部質保証推進組織等の関わり</li> </ul> <p>根拠資料→A1-1*学則、A4-36*学位規則、基礎要件確認シート 10,12</p>	
◆成績評価、単位認定及び学位授与について問題点があれば記述してください。		
《回答》 特になし。		
点検・評価項目(6)	4-6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
評価の視点1※ 【評価要件○】	<p>学位課程の分野の特性に応じた学修成果を測定するための指標（特に専門的な職業との関連性が強いものにあっては、当該職業を担うのに必要な能力の修得状況を適切に把握できるもの。）を設定している。</p> <p>※指標は定量的指標、定性的指標を複数組み合わせ設定することが望ましい。</p> <p>根拠資料→B4-70 学習成果の測定指標と測定方法及び測定結果</p>	
評価の視点2※ 【評価要件○】	<p>学生の学習成果の測定方法を開発している。</p> <p>《学習成果の測定方法例》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アセスメント・テスト</li> <li>・ルーブリックを活用した測定</li> <li>・学習成果の測定を目的とした学生調査</li> <li>・卒業生、就職先への意見聴取</li> </ul> <p>根拠資料→B4-70 学習成果の測定指標と測定方法及び測定結果</p>	
★項目(6) 4-6①全学部・学科、研究科・専攻で共通設定している「DPに示す学習成果（能力や資質）」「学生アンケートや調査」以外で、部局独自として設定している学習成果の測定をするための指標と、その測定方法をすべて記述してください。		
《回答》2021年度に行われた「評価指標と到達目標」設定の作業の中で、英米文学科の教育課程が機能しているかを測るための客観的指標として、専門教育科目の選択必修科目の卒業論文の提出率を用いることとした。具体的な到達目標としては、「全4年生の2割（26名）以上が卒業論文を提出する」とした。	<p>《根拠資料》</p> <p>04-C4-12：C16改 各学科の評価指標の中間報告について</p>	
★項目(6) 4-6②学習成果を測定した結果（共通設定と、独自設定含む）について代表的事例を回答してください。また、全ての測定結果を根拠資料として提出してください。		
《回答》 2022年度の卒論提出者は12名であり、4年生（約130名）中の1割弱にあたる。	<p>《根拠資料》</p> <p>04-C4-13： ①2022年度卒業論文題目一覧 ②（英米文）部局ごとの評価指標入力フォーマット</p>	

	<p>ト 活用結果中間報告</p> <p>③【議事録】2022年度第14回英米文学科協議会 (2月14日)</p> <p>④【議事録】2022年度第15回英米文学科協議会 (3月1日)</p> <p>⑤A1-22.学生認識/行動調査 2021 結果</p>
<p>★学習成果の指標と測定方法に関する課題や長所などを記述してください。</p>	
<p>〈回答〉 2022年度は、卒論履修者全員（13名、追加1名で合計14名）の卒論提出を達成することが叶わなかった（12名提出）。この状況を受けて、卒論の在り方、指導の仕方、また勧め方について学科内で議論の必要があると考え、卒論担当者間で①卒論指導方法、②卒論指導上の問題点、③3年次における卒論履修の勧め方について学科内で意見を募り、回答を学科全体で共有した（第15回学科会議で報告；以下、資料「評価指標について（卒論）」より引用）。</p> <p>卒論担当者からの回答から、そもそも卒論を履修する学生が少ないことについて、まず必修でないこと、四年次は就活（教職も含む）に集中したい等の理由の他に、卒論を書くということがイメージできないということが読み取れる。</p> <p>卒論指導の仕方は、個別指導のみが中心の場合、（履修者が複数の場合）全体で集まる場を作る場合など、様々であり、学生と個別面談をするペースも、卒論執筆作業の段階に応じて大きく異なる。</p> <p>三年次のゼミの中で、卒論そのものを手に取らせたり、これまでの卒論テーマの一覧を見せたりするなどしつつ、個々の学生と関心領域をについて面談をするなどし、卒論を書くことの具体的なイメージを学生が出来るような工夫が必要である。また、一年次のFreshman Seminarでレポート執筆の基本（参考文献の扱い、引用の仕方、剽窃とは何か、何故してはならないか、論の組み立て方、図書館の利用の仕方、等）を学び、3年次のゼミ・レポート執筆と進むことで、卒論を書く上での具体的な作業を大学時代の早くからさせることも必要である。</p> <p>また、学生の関心領域は様々であることを考慮し、テーマは幅広く受け入れることも一つの方法である。また、主査は一人だが複数の教員から指導を受けられるような卒論担当者間（あるいはそれ以外の教員）での連携も必要である。</p> <p>これらの改善を行い、卒論履修者の増加、また提出者の量的・質的増加を目指したい。</p> <p>また、「学生認識/行動調査 2021 結果報告」から、本学科生の入学動機、授業への満足度に関するデータを分析した結果を学科内で共有した（第14回学科会議）。その中で、一定の傾向（不本意入学が多いこと、一定数の学生が「シラバス内容を知らない」「授業を通じて知識・技能の向上を実感していない」と回答している；他方「授業内容の良さ」から「授業内容に満足」と回答する学生もあり）と掴めるものの、アンケート回答者数が83名と全英米文学科生（約130名×4＝約520名）からすると極端に少なく、英米文学科生の実態を反映したものとは言い難い。学習成果を測るために学科独自でアンケートを行うなどの対策も必要かも知れない。</p>	
<p>★学習成果の測定結果の分析方法に関して課題や長所などを記述してください。</p>	
<p>〈回答〉 卒業論文の提出率を教育課程の評価指標に挙げているものの、卒業論文自体の質には全く触れていない。今後、提出された卒業論文の複数の教員による審査を行う、あるいは卒業論文の共同発表会を行うなど、何らかの形のピア・レビューが求められる。</p>	
<p>点検・評価項目(7)</p>	<p>4-7教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取組を行っているか。</p>
<p>評価の視点1※ 【評価要件○】</p>	<p>適切な根拠(資料、情報)に基づく定期的な点検・評価を実施している。</p> <p>・学習成果の測定結果の適切な活用</p> <p>根拠資料→B4-70 学習成果の測定指標と測定方法及び測定結果、B2-51 2023年度点検・評価シート、B2-52 会議録(または準ずるメール記録)：(開催日) 2023年度自己点検・評価について</p>
<p>評価の視点2 【評価要件○】</p>	<p>点検・評価結果に基づく改善・向上に向けた取組を行っている。</p>
<p>★項目(7) 4-7①学習成果測定の実績と、実際の測定結果にもとづいた教育改善の取り組み状況を、具体的に回答してください。</p> <p>他大学事例：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>論文やプレゼンテーションなど成果報告の機会が広がり、その開催方法も交流や競争性を取り入れた場へと展開している。</li> <li>「学生の授業に関する調査」結果に対して、授業担当者はコメントや具体的な改善策を公表している。</li> <li>英語に関する学習成果把握の取り組みとして、全学年対象の英語アチーブメントテストの結果を英語スコア管理システムにより</li> </ul>	



<p>一元的に管理しFD部会でデータの検証を行い英語教育の改善に取り組んでいる。</p> <p>・論文中間発表や論文審査基準の結果をもとに、カリキュラムとその内容、授業方法を自己点検し、特に博士論文は、助成制度を設けているため学術的水準の維持、向上に繋げている。</p>	
<p>〈回答〉 上記「学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための措置」について問題点、および「学習成果の指標と測定方法に関する課題」は、現在進行中の新カリキュラム作成に関する議論の中でも取り上げられている。新カリキュラムでは、能力別クラスの設定、1年次、2年次、3年次の語学科目での到達目標の順次性の確保、Freshman Seminar（基礎セミナー）でのより充実したレポート指導の実施などを盛り込む予定である。</p>	<p>〈根拠資料〉</p> <p>04-C4-14：20230314 学科会議資料① 新カリ案：基礎教育・英語学・英語教育科目</p>
<p>★項目(7)4-7②改善・向上に向けてこれまでに取り組んだこと、現在取り組んでいることがあれば、具体的に回答してください。2019年度以降の取り組みも含めて記述してください。</p>	
<p>〈回答〉 これまで英米文学科では、基礎教育科目、専門科目における授業内容や到達目標の設定に積極的に関わらず、概ね担当教員の裁量に委ねる方針を取ってきた。この方針は教育の自由を確保する上で重要ではある一方で、学科として学生の学習成果、特に基礎的な英語の力の伸びが管理できていないことが浮き彫りになってきた。これを受け、新カリキュラム委員会を中心に、少なくとも基礎教育科目については学科として各科目で最低限教授すべき内容や目指すべき目標を提示すべきという認識の上で「語学科目の授業概要」を策定し、学科での承認の上、各教員に配信し、さらに「授業概要」に謳われた授業内容・目標の実施・実現可能性について各教員からのフィードバックを募った。学科と科目担当者とのこうしたやり取りは、教育の改善・向上のために大変重要であり、今後も継続していきたい。</p>	<p>〈根拠資料〉</p> <p>04-C4-15：</p> <p>①語学科目の授業概要</p> <p>②アンケート（語学）</p>

II 現状を踏まえ、長所・特色として特記する事項（工夫していること）を、意図した成果（目標）を明確にして記述してください。

※注：前年度の取り組みに限らず、過去から継続している事項も含める

<p>長所・特色</p>	<p>新カリキュラム委員会を中心に、学科の中で現在カリキュラムの中で実行できる教育の改善・向上、また新カリキュラムにおいて実現すべき改善・向上の検討を、非常勤講師を含む授業担当者との意見交換の中で行っている。</p>
--------------	--

III 今回の点検・評価の結果、明らかになった新たな問題点や課題について、今後の方針や計画を含めて記述してください。

※注：複数記述可、ただし2023年度事業計画としてアクションプランを策定しているものは除く

<p>問題点・課題</p>	<p>学習成果の指標として「学生認識／行動調査2021」の結果を用いているが、回答者数が少ないため、結果が実際の学生の状況を反映しているとは言い難い。卒業論文につながる指導や、語学力向上などに関し学科独自のアンケートの実施し、学生の実態把握が行うことが望まれる。</p>
---------------	---

IV 【改善計画（事業計画）】

カテゴリ	計画番号	B票No. or 開始年度	改善計画（アクションプラン）	内容（改善を要すると判断した根拠）	目標の評価指標	目標値	年度計画
②	1	2022-4 III-1(4-6)	(4-6 学習成果の習得を図るための指標と測定方法の開発) 卒業論文提出者比率の増加	全4年生の2割(26名)以上が卒業論文を提出する。	目指す目標は、「全4年生の2割(26名)以上が卒業論文を提出する状態を安定的に保つ」ことである。 C: ①現段階で卒業論文執筆希望を提出している4年生13名が全員、卒論を提出するよう指導する。同時に、②3年次のゼミナールにおける指導(卒業論文のテーマ探しにつながるゼミナールでの活動)を行い、また③初年次教育、また2年生の指導において、文献資料の検索、レポートの書き	A(100%): Bの状態の保持 B(80%): 2割以上が卒論希望・提出 C(50%): 卒論生13名が提出 D(20%):	2022 末結果: D 2023: B 2024: A

					<p>方の指導を行い、4年次に卒論を書くことを意識づける。</p> <p>B：2023年度の全4年生の2割以上が卒業論文執筆を希望する状況を目指し、希望した卒論生が卒論を提出するよう指導する。</p>		
②	2	2022-4 III-1(4-7)	(4-7学習成果の測定結果の活用) 卒業論文提出者比率の増加	<p>現行の評価指標・到達目標以上の卒業論文提出（4年生の3割以上が提出）を目指す。</p>	<p>全体の目標は、B表（4-6）にある到達目標（2022年度は卒論希望者（13名）の卒論提出を目指し（E）、卒業論文を4年生の2割以上が提出）を達成後（C）、さらに4年生の3割以上が卒業論文を提出し、その状態が安定することを目標とする。卒業論文への取り組みについて、量的向上（提出者の増加）だけでなく質的向上（卒論指導の在り方、卒論自体の質の向上）も目指すために、卒論指導担当者間で情報共有、意見交換を図り、より良い卒論指導、卒論への関心を喚起するような初年次教育の在り方、卒論提出・口頭審問までの流れの在り方等を審議し（B）、それを実際の卒論指導や1～3年次での教育指導に活用する。</p>	<p>A(100%)：Bの状態を保持 B(80%)：3割以上が提出 C(50%)：卒論指導の在り方等の精査 D(20%)：2割以上が提出</p>	<p>2022 末結果：E 2023：D 2024：C 2025：C 2026：B 2027：A 2028：A</p>
④ お よ び ② ③	10	2023 (2022～継続)	(英米文学科)新カリキュラムの点検、調整、改善	<p>2011年度から施行しているカリキュラムの点検、調整、改善を行う。本学科は英米を中心とする英語圏の文学、言語、文化に関する教養を持った人材の育成を教育研究上の目標としている。そのため学生の基礎学力、特に英語力の現状に対応すべく、小委員会に適宜新カリキュラムの精査をかけ、専門選択科目を少数クラスにしてきめ細やかな指導ができるよう、授業改善を行う。今後の習熟度別クラス編成を考慮に入れつつ、基礎語学科目のカリキュラム構成を再考していく。</p>	<p>2022年度中に確定する予定の新カリキュラム案を元に、2025年度施行に向けて学科会議、教授会、学部長会議、理事会等での承認を受けるための必要な文書作成作業を行う。また、新カリ案は教職課程との関連に関わる準備を進める。担当コマ数に変更のある教員への事前説明は遅くとも2023年度初頭に行う。</p>	<p>A(100%)：新カリキュラム施行 B(80%)：教職課程との関連に関する準備 C(50%)：新カリ案の教授会・学部長会議での承認 D(20%)：担当コマ・コマ数変更のある教員への事前通知</p>	<p>2023：D C 2024：B 2025：A</p>

V 【内部質保証委員会による点検・評価】

<p>2022年度〈所見〉</p> <p>インタラクティブ（双方向）な授業展開のための少人数授業の事例、教員・学生間や学生同士のコミュニケーション機会の確保の事例、授業方法としてグループ活動の活用の事例に記された積極的な取り組みは高く評価できる。また、学修成果の測定方法の開発の一環として「卒業論文の提出率」を指標とし測定結果の活用指針などを定め、それに質的向上も目指すために、初年次教育の在り方から検討がなされている点も評価できる。</p> <p>そのほかの評価の指標は、学位授与方針（DP）に示した学習成果の積み上げ（能力の積算）、学習成果の測定を目標とした学修行動調査等としている。活用としては、カリキュラムの検証、DPに示した学習成果との検証、学修支援内容の検討としている。これ</p>
---

らの測定結果は今後、基準4の点検・評価の際の根拠資料として提出することになる。今後、測定結果を活用した改善・向上への取り組みが望まれる。

### 2023年度<所見>

英米文学科の教育課程はDP（学位授与方針）とCP（教育課程の編成・実施方針）の関連が明確な形で編成されている。そのことは、カリキュラムツリー、カリキュラムマップにもとづいた点検・評価シート等の根拠資料から確認できる。

学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための措置として、1年時に大学生活の基本を身につける科目としてのFreshman Seminarを設置したり、年度初めのプレースメントテストにおいて下位の学生にはBasic Englishの履修を奨励したりしていること、基礎教育科目担当者向けにガイドラインとして「語学科目の授業概要」を配信して学生の到達目標を提示し、その後アンケートを実施していることなどは大いに評価できる。

また、主体的な学びの事例、インタラクティブ（双方向）な授業展開のための少人数授業の事例、教員・学生間や学生同士のコミュニケーション機会の確保の事例、授業方法としてグループ活動の活用事例に記された積極的な取り組みや新カリキュラム委員会を中心に、学科の中で現在カリキュラムの中で実行できる教育の改善・向上、また新カリキュラムにおいて実現すべき改善・向上の検討を、非常勤講師を含む授業担当者との意見交換の中で行っていることは評価できる。

学生の学習成果の測定という点については、卒業論文の提出率をもって学修成果の測定をする場合、本学科は文学部のほかの学科に比べると、卒業論文の提出者が少ないことが残念である。しかし、少ないながらも卒業論文の質を高めるべく、何らかのピア・レビューの必要性に言及されている点は評価できる。また、学修行動調査結果による学生の満足度についても検証し課題を抽出されていることは高く評価できる。なお、事業計画のアクションプランとして2025年度施行予定の新カリキュラムの計画で「学生の基礎学力、特に英語力の現状に対応するカリキュラム」と明示されているので、貴学科の目指す「英語力」に関して学習成果の測定方法と指標を設定することも選択肢の一つと思われる。今後全学的な学修成果可視化の実現のために、DP（学位授与方針）・AG（到達目標）の修得度がグラフ化される過程において、英米文学科の取り組みが一層活用されることが期待される。

### ◆評価の基準について

※各基準の「自己評価」は、各部局の判断に委ねられます。なお、青字部分は、本学としての解釈です。

S	大学基準に照らして極めて良好な状態にあり、理念・目的（教育研究上の目的）を実現する取り組みが卓越した水準にある。 (評価の視点に対して、クリアしており、さらに向上させるための取り組みを行っている、または、他部局の参考となるような特色ある取り組みを行っている場合)
A	大学基準に照らして良好な状態にあり、理念・目的（教育研究上の目的）を実現する取り組みが概ね適切である。 (評価の視点に対して、クリアしている状況と判断する場合)
B	大学基準に照らして軽度な問題があり、理念・目的（教育研究上の目的）の実現に向けてさらなる努力が求められる。
C	大学基準に照らして重度な問題があり、理念・目的（教育研究上の目的）の実現に向けて抜本的な改善が求められる。

<注>「大学基準」は大学基準協会「大学評価ハンドブック」を参照のこと。

解説にある「大学は云々・・・」については、学部、研究科等の現状に置き換える。

### 基準4 教育課程・学習成果

#### 【大学基準】

大学は、自ら掲げる理念・目的を実現するために、学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針を定め、公表しなければならない。また、教育課程の編成・実施方針に則して、十分な教育上の成果を上げるための教育内容を備えた体系的な教育課程を編成するとともに、効果的な教育を行うための様々な措置を講じ、学位授与を適切に行わなければならない。さらに、学位授与方針に示した学習成果の修得状況を把握し評価しなければならない。

#### (解説)

大学は、その理念・目的を実現するために、授与する学位ごとに、修得すべき知識、技能、態度など当該学位にふさわしい学習成果を示した学位授与方針を定め、公表しなければならない。また、学位授与方針に基づき、教育課程の体系、教育内容、教育課程を構成する授業科目区分、授業形態等を示した教育課程の編成・実施方針を定

め、公表しなければならない。

大学は、学士課程、修士課程、博士課程及び大学院の専門職学位課程のいずれの学位課程にあっても、法令の定めに加え、自ら定める教育課程の編成・実施方針に基づいて授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しなければならない。その際、学術の動向や、グローバル化、情報活用の多様化その他の社会の変化・要請等に留意しつつ、それぞれの学位課程における教育研究上の目的や学習成果の修得のためにふさわしい授業科目を適切に開設する必要がある。また、学問の体系などを考慮するとともに、各授業科目を大学教育の一環として適切に組合せ、順次性に配慮し効果的に編成する必要がある。

大学は、教育課程の編成・実施方針に基づき、授業内外における学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じなければならない。その一環として、適切なシラバスを作成するとともに履修指導を適切に行い、また、授業や研究指導の計画に基づいて教育研究指導を行うほか、授業形態や授業内容、授業方法に工夫を凝らすなど、十分な措置を講ずることが必要である。

大学は、履修単位の認定方法に関して、いずれの学位課程においても、各授業科目の特徴や内容、授業形態等を考慮し、単位制度の趣旨に沿った措置を採ることが必要である。また、教育の質を保証するために、あらかじめ学生に明示した方法及び基準に則った厳格かつ適正な成績評価及び単位認定を経て、適切な責任体制及び手続によって学位授与を行わなければならない。

大学は、学位授与方針に示した知識、技能、態度等の学習成果を学生が修得したかどうかを把握し、評価することが必要である。そのために、学習成果を様々な観点から把握し評価する方法や指標を開発し、それらを適用する必要がある。

大学は、教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価し、その結果を改善・向上に結びつける必要がある。その際、把握し、評価した学生の学習成果を適切に活用することが重要である。